

## 松山港

松山港は、県都松山市の海の玄関口として、古くから瀬戸内海航路の要衝を占め、本州と九州を結ぶ瀬戸内海における重要港として発展してきました。

松山港のうち最も古くから拓かれ商港として利用されてきたのは三津浜港（内港地区）でした。その三津浜港が明治 17 年の暴風雨で決壊したのを契機に、県議会では三津浜港は自然条件が悪く汽船時代の港には適していないとされ、興居島（ごごしま）が天然の防波堤となる高浜に新しく築港し、県都の玄関口とすべきであるとの意見が示されました。その後、高浜港（高浜地区）の築港が具体化され、明治 21 年に高浜港に栈橋が設置され、明治 25 年には伊予鉄道が三津から高浜まで延長されました。明治 36 年には高浜港に南栈橋が、明治 38 年に北栈橋が架設され、明治 39 年に高浜港開港式が行われました。これ以後、大阪商船の定期便はすべて高浜港に寄港することになったため、三津浜港の衰退が懸念されました。このため、三津浜町は三津浜築港に力を入れ、大正 5 年～大正 12 年に三津浜町営で防波堤の築造、浚渫、埋立等を行い、昭和 6 年～昭和 11 年には第一・第二船溜を築造しました。昭和 12 年に高浜港が位置する新浜村が三津浜町に合併したのに伴い、昭和 13 年に高浜港は三津浜港に統一改称されました。さらに昭和 15 年に三津浜町が松山市と合併し、それ以後三津浜港は松山港と称されることになりました。

戦後、昭和 21 年～昭和 25 年に第二期内港改修工事として三津浜内港地区の第三船溜築造工事が行われ、この結果、内港は機帆船・小型汽船の基地となりました。松山港は昭和 26 年に重要港湾に指定され、昭和 26 年度から運輸省により外港修築工事が本格的に着手され、防波堤の築造、浚渫等が行われました。吉田浜地区では、臨海工業地帯の大規模工場の操業に伴い、原料の輸移入や製品の輸移出を円滑にするため、昭和 26 年度から松山市の直営により修築工事が行われました。昭和 29 年には松山港は県管理の港湾になるとともに開港に指定されました。外港地区では昭和 40 年と昭和 44 年にフェリー栈橋が設置され、高浜地区では旧高浜港の北に昭和 42 年に新高浜港（観光港）が開港し、昭和 45 年にはフェリー基地も完成しました。今出地区では昭和 49 年度～昭和 53 年度に木材専用港が運輸省の直轄事業で築造され、昭和 53 年度には木材集積地も完成しました。

港湾施設の整備に伴い、松山港は、臨海部に立地する化学工業等に関連した外貨貨物や内貨貨物を中心とした背後圏の流通拠点として、また旅客フェリー等による九州・中国方面等との交流拠点として重要な役割を果たしています。さらに松山港では、四国及び瀬戸内経済圏の貿易拠点の形成を目指し、外港地区国際物流ターミナルなど、大型船に対応した港湾施設の整備が進められており、一層の発展が期待されています。

＜参考文献：愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史地誌Ⅱ（中予）」1984 年、松山市史編集委員会編「松山市史第 3 巻、第 4 巻」1995 年、四国地方整備局事業評価監視委員会資料など＞



外港地区



高浜地区(観光港)

